

《論 文》

白居易詠花詩における「白」の意味

池間里代子
中元 雅昭

About the Meaning of White Seen in the BoJuyi's Poem Written on Flowers

RIYOKO IKEMA
MASAAKI NAKAMOTO

キーワード

白花 (white flowers), ハス (lotus), 牡丹 (peony), 仏教 (Buddhism), 莊子 (Zhuangzi)

はじめに

中唐を代表する白居易は非常に多作であり、とりわけ花を含む植物を詠んだ詩が多いといわれる。本稿ではその中で白花を取り上げ、彼がどのような態度で詩作したのかを概観し、なぜ白花を好んで題材としたのかを考察するものである。

白居易(772-842)は、中国の唐代を代表する詩人として広く知られている。字は楽天で、^{あざな}下邳(陝西省渭南)の生まれである。29歳で進士に及第した後は、左拾遺などの重職を歴任するまでに至ったが、43歳の時に江州の司馬に左遷されて以降、中央の政争に巻き込まれることを自ら避けるようになった。そして、晩年は洛陽で閑職に就いて自適な生活を送り、75歳の生涯を全うした。

彼の詩文集である『白氏文集』には、2800首を超える詩が収められている。白居易は、友人である元稹に寄せた書簡「與元九書」の中で、その詩の内容を「諷諭詩」「閑適詩」「感傷詩」「雜律詩」の4種に分類している。ここでそれぞれの概略を簡単に述べれば、「諷諭詩」とは「新樂府」や「秦中吟」などに代表される社会

に目を向けた詩のことで、民衆を救い政治の誤りを正すために詠まれた詩である。また、「閑適詩」では、職務を離れた静かな暮らしの快適と身体的精神的の安楽などが中心に詠われている。そして、「感傷詩」は自分の外側の何かに触れ、感情が揺れ動き、それを詠嘆した詩であり、最後の「雜律詩」とは、先の3者が古体詩であるのに対して「律詩」という近体詩、つまり、詩の形式で分類された一群を示す。

古来より白居易の詩の作風は、その艶情や風流さから「元和体」とも呼ばれ、表現の平易さと日常性とその大きな特徴の一つと言えよう。白居易は、これまでの詩人たちが取り上げてこなかった日常的で身近な事物までも巧みに詩の中に詠い込んでいった。そこには白居易の細やかな観察眼と繊細な感性が窺われる。それ故、白居易の作品を読むと、描かれた情景がより具体的に、一層はっきりとした形で眼前に浮かび上がってくる。そのような白居易の日常性豊かな作風は、彼自身が日々の平凡な生活をより充実したものにしようとする積極的に努めたことに起因していよう。交友や飲食は勿論のこと、琴などの音楽にも精通し、その楽曲の旋律をよりリアルな音色として詩中で再現している。また、白居易は赴任先の自宅の庭で各地に生える草木

などの植物を移植して、所謂ガーデニングを楽しみ、そこで鶴を飼い、さらには敷地内の池で魚釣りをしていたほどである。白居易は身の周りの動植物までも事細かにスケッチし、それを詩という形でつぶさに書き残したのである。まさに、白居易の詩の作品群は唐代文化史の宝庫ともいえるだろう。

1. 白居易の詠花詩について

中唐においては白居易が多作ゆえに植物詩が目立つが、総作品中での割合でいうと決して最多というわけではない。市川桃子によると、蓮については李賀・毛郊に次いで3番目、牡丹については王建・元稹に次いでやはり3番目だそうである。⁽¹⁾ その中で彼の特徴は花に対して「鑑賞・蒐集・栽培」という、人間が上位にあって植物を趣味的に見るという態度ではない。彼は植物に対して「友情・共感・語りかける」のように自己と植物とを同列に見立てている。他の詩人が上から下へと見る縦的態度であるのに対し、彼は自己から植物へのまなざしが水平に向いている。これはなぜだろうか。白居易は自己の感覚は違うようだが、彼以外の官僚詩人の中では時代と運が良かったレアケースと言える。自己の才能を存分に発揮できる環境にあり、比較的屈折が少なかった。そんな満ち足りた環境でも「私の気持ちを分かってくれるのは花たちだけだ」と思っており、他人には言えない、言っても分かってはもらえないであろう喜怒哀楽を、植物に対して率直に吐露している。しかも、彼は人生の最晩年に自ら『白氏文集』の決定稿を選ぶことができた。彼なりに持っていた屈折した気持ちを植物に仮託する形で表現した詠花詩は、削除することができなかつたばかりか、是非とも残したいという意思が感じられる。

白居易が詠った花は比較的多岐にわたっているが、本稿ではその中で特に白蓮と白牡丹を中心に論ずることとする。その理由は、彼の蓮詩においては「白」が大変多く、大きな特徴と

なっていること。牡丹詩では赤牡丹詩もあるが、むしろ牡丹フィーバーを冷やかに見つめる視点があり、他の詩人が描かなかつた白牡丹詩が2首あること。これらをまず概観し、その後で「白花」の意味について考察を行なう。

2. 蓮と牡丹についての考察

2-1. 白蓮について

江州司馬に左遷されていた時の作品。(40歳代)⁽²⁾

- ①…東林寺有白蓮花，皆植物之貞勁秀異者。…
 「潯陽三題」序
 東林寺に白蓮花があつて、植物の中ですばらしく抜きんでている。
- ②…東林北塘水，湛湛見底清。中生白芙蓉，齒
 苞三百莖。白日發光彩，清飄散芳馨。洩香
 銀囊破，瀉露玉盤傾。…
 「潯陽三題 東林寺白蓮」
 東林の北に湖があり、その水は底が見えるほど澄んでいる。その中に白い蓮が咲いていて、咲きかけが三百本ほどある。陽の光がきらめく中、清らかな香りが風に乗って広がる。銀の袋が破れて香りが漏れ、玉盤の花びらが傾いて露がこぼれる。
- ③…夜深眾僧寢，獨起繞池行。欲收一顆子，寄
 向長安城。
 「潯陽三題 東林寺白蓮」
 夜遅く僧侶たちが寝につくころ、一人起きて池をめぐる。(白蓮の実を)一つ採って、長安に送ろうと思う。
- ④…紅鯉二三寸，白蓮八九枝。…
 「草堂前新開一池養魚種荷日有幽趣」
 赤い鯉は二、三寸で、白蓮は八、九本ほどある。

⑤何以淨我眼，砌下生白蓮。

「香鑪峰下新置草堂即事詠懷題於石上」
 何が私の眼を清めてくれるのか、それは砌
 (軒下の石畳) に生えた白蓮だ。

⑥春抛紅藥圃，夏憶白蓮塘。

「郡齋假日憶盧山草堂兼寄二林僧社三十韻多敘
 貶官已來出處之意」

春には紅藥畑を放ち、夏には白蓮の咲く池を
 懐かしむ。

⑦青石一兩片，白蓮三兩枝。寄將東洛去，心於
物相隨。石倚風前樹，蓮栽月下池。

「蓮石」

青石を一、二片と白蓮を三、四本。これらを洛
 陽に送り、物心共に満足な思いだ。石は風の
 そよ吹く木の前に置き、蓮は月の映る池に植
 えよう。

これより、洛陽時代の作品。(50代半ば以降)

⑧吳中白藕洛中栽，莫戀江南花懶開。萬里攜歸
爾知否，紅蕉朱槿不將來。

「種白蓮」

蘇州で得た白蓮を洛陽に持ってきて植えたの
 だ、江南の花々が中々咲かないと憂うので
 はないぞ。遠い道中持ち帰ったおまえは知る
 まいが、紅蕉も朱槿も持ち帰らなかったの
 だ。

⑨白藕新花照水開，紅窗小舫信風迴。誰教一片
江南興，逐我殷勤萬里來。

「白蓮池汎舟」

白蓮がこの地で新たに水に照り咲いたので、
 赤い小窓や小さい船の間を風に任せて廻っ
 ていく。江南の美しいものを私が遠路をいと
 わずに連れてきたことを知らせてくれ。

⑩雨滴篷聲青雀舫，浪搖花影白蓮池。停杯一問
蘇州客，何以吳松江上時。

「池上小宴問程秀才」

雨が青雀船に降りかかり、池の波間に白蓮の
 花影が見える。盃をしばし止めて蘇州からの
 客に尋ねる。まるで呉の松江にいるようでは
 ないか、と。

⑪素房含露玉冠鮮，紺葉搖風鈿扇圓。本是吳州
供進藕，今為伊水寄生蓮。移根到此三千里，
結子經今六七年。不獨池中花故舊，兼乘舊日
採花船。

「六年秋重題白蓮」

白い房は露を含んで玉冠が鮮やかだ。濃緑の
 葉が風に揺れて丸い団扇のようだ。元々蘇州
 から連れてきた蓮だが、今は伊水に生ずる蓮
 となった。三千里もの遠方から移植し、実を
 結ぶようになって六、七年にもなる。池に咲
 く花が元のままであるだけでなく、昔のよう
 に採蓮船に乗るようになつた。

⑫小桃閒上小蓮船，半採紅蓮半白蓮。不似江南
惡風浪，芙蓉池在臥床前。

「看採蓮」

小桃(女子の名)の乗る採蓮船が上って行
 き、赤い蓮や白い蓮をこもごも採っている。
 江南のように波風がひどくないので、蓮池の
 様子をベッドの中からうかがえる。

⑬小娃擲小艇，偷採白蓮迴。不解藏蹤跡，浮萍
一道開。

「池上絶之二」

小さい女の子が小船を竿さし、白蓮をこっそ
 り採って帰っていく。その形跡を隠さないの
 か、浮草が一筋開いている。

⑭白白芙蓉花，本生吳江濱。不與紅者雜，色類
自區分。誰移爾置此，姑蘇白使君。初來苦憔悴，
久乃芳氣氤。月月葉換葉，年年根生根。
陳根與故葉，銷化成泥塵。化者日已遠，來者
日復新。一為池中物，永別江南春。

「感白蓮花」

真白な蓮の花、元々は蘇州から来たのだ。赤
 い蓮と混じることもなく、その色を保ってき

た。だれがここに移植したかという、蘇州の白さん（自分のこと）だよ。初めて来た時にはやつれてはいたけれども、だんだんと良い香りを放つようになった。ひと月ごとに葉が変わり、年ごとに根が生じた。古い根と葉は、泥に変わっていった。変わったものは遠くに行き、来るものは日ごとに新しくなる。すべて池の中になじみ、江南とは永の別れだ（江南の風景を忘れてしまうほどだ）。

一般的に言って、白蓮は仏教との結びつきを想起するが、市川桃子は白居易の描く白蓮と仏教の関連性はむしろ小さい、という。洛陽に帰ってからは江南へのノスタルジアと、万里を携えてきたものだという希少性への自慢とがあり、ただ単純に好きだ、見ていて嬉しいと思っているようだ、と断じている。⁽³⁾そして、その表現は淡泊で、日記を付けているように淡々と、どのように自分が白蓮を愛し、庭の池に移植して大切にされたかを述べているにとどまっている、と結論付けている。

しかし、果たして本当にそう断じられるだろうか。白蓮については『晋書』にこのような記載が見える。「慧遠法師居廬山東林寺、有白蓮花、與陶靖節十八人同修淨土、號白蓮社。（慧遠法師（334-416）が廬山東林寺にあり、白蓮花が咲いていて、陶靖節ら18人が浄土と一緒に修行している。白蓮社という）」⁽⁴⁾その後、元興年間（402年ごろ）に慧遠が在家を含む123名で東林寺において修行をし、後に浄土教へと発展していった。また慧遠には「虎溪三笑」の故事がある。虎溪とは東林寺の前にある溪で、慧遠は修行のため俗界禁足の戒を作っていた。ある日陶淵明（365-427）と陸修静（406-477）が彼を訪ねて清談し、二人を送っていく際、そこで虎の嘯くのを聞いて戒を破ったことに気づき、三人で大笑いしたというものである。また、南朝宋の謝靈雲（385-433）が慧遠に心服し、その庭に池を掘り白蓮を植えたという話が伝わる。⁽⁵⁾

おそらく白居易は単に白蓮を愛好していたの

ではなく、これらの故事を知った上で「あの東林寺の白蓮」としていとおしんだのではないだろうか。

また、白蓮愛好の背後には仏教との関係があると指摘するものもある。

西村富美子は『法華経』湧出品の「世間の法に染まざること、蓮花の水に在るが如し」を引き、白蓮花は仏教的なつながりを持つ植物だ、と言っている。⁽⁶⁾

白居易の詩の中にも白蓮が「仏教的な清浄」を意味するという箇所がみえる。

上人處世界、清淨何似似。似彼白蓮花、在水不著水。

「僧別宣上人」

お上人様のいらっしゃる世界で、清浄とは何に似ているのか。かの白蓮花が、水にあるのに水に着かない点が似ている。

宋代で陸游（1125-1209）が「初見廬山」で「尚喜東林尋舊社、月明清露濕芙蓉（東林に旧社を尋ねると、月が明るくけがれない露がハスを潤しているのがうれしい）」と詠った。この詩も白居易が見出した東林寺の白蓮花が意識されているのだろう。⁽⁷⁾

一方、ハスのもう一つのイメージとしては「恋」というものがある。漢代に採取された民謡集『楽府』にみえる「江南」という蓮採り労働歌がある。

江南可採蓮、荷葉何田田。魚戲蓮葉間、魚戲蓮葉東。⁽⁸⁾

江南のハスをとろうよ、ハスの葉はとても大きいよ。魚がハスの葉影に戯れ、魚はハスの葉の東に戯れる。

白居易も似た詩を作っている。

汚溝貯濁水、水上葉田田。

「京兆府新栽蓮」

淀んだ溝に濁った水が貯えられ、その水の上には大きな葉が出ている。

この歌に限らないが、江南地方民謡－呉歌－の特徴として双関語（掛け言葉）が挙げられ、本邦でもそうだが、特に恋愛を歌う場合にはストレートな表現を避け、言葉に裏の意味を持たせて表現することがある。例えば先に挙げた「江南」では「蓮lián」と「恋lián」とが同じ発音であることから「ハスを取りに行く＝恋をつかみに行く」となる。また「荷hé」は「和hé」と同音であるから「ハス＝和合（円満な結婚生活）」というアレゴリーになる。⁽⁹⁾ 実際に白居易の白蓮詩⑨⑩⑪⑫⑬には蓮採船を浮かべて楽しんでいる情景が詠われている。当然『楽府』「江南」を意識しているだろう。しかし、白居易においては江南の風景が洛陽にあっても身近にあること、それを自分が造ったことの自負が先立っている。すでに老境ともいえる身にとって「蓮＝恋」というメタファーを使って作品を作る余力がなかったのか、あるいは幸せだった江南時代を振り返るだけで満足だったのか。せめて作品の中に少女を登場させることで若々しさ、瑞々しさを醸し出すことに成功している。

2. 2. 白牡丹について⁽¹⁰⁾

①城中看花客，旦暮走營營。素華人不顧，亦占牡丹名。開在深寺中，車馬無來聲。唯有錢學士，盡日遶叢行。憐此皓然質，無人自芳馨。眾嫌我獨賞，移植在中庭。留景夜不暝，迎光曙先明。對之心亦靜，虛白相向生。唐昌玉蕊花，攀玩眾所爭。折來比顏色，一種如瑤瓊。彼因稀見貴，此以多為輕。始知無正色，愛惡隨人情。豈惟花獨爾，理與人事并，君看入時者，紫艷與紅英。

「白牡丹」和錢學士作⁽¹¹⁾
街中で牡丹の花見客を見ると、朝な夕なに営々として走り回っている。しかし白い花は人に見向きもされませんが、ただ牡丹という名がついている。奥深い寺の中でひっそりと咲

くだけで、車馬で尋ねる人もいない。ただ錢徽だけが、ひねもす白牡丹の群をめぐるだけだ。この白いものを憐れむべきだ、誰も自分から良い香りを発しない。皆が嫌っても私は鑑賞したいので中庭に移植しよう。このまま夜も眠らず、朝日を一番先に迎える。これに対すると心が静かになり、虚と白とが生じてくる。⁽¹²⁾ 色がついていないせいで、愛したり憎んだりするのは人の心にあるのだと初めて分かったことだ。唐昌の玉蕊花は皆に喜ばれ、争って見たがられる。折取って色を比べれば、まるで瑤瓊のようだ。これは珍しいから尊ばれ、白花はありふれているので軽く扱われる。元々正しい色などというものは無いのに、愛憎や好悪は人の感情が基準となるのである。この道理は花だけでなく人事も同じで、人の目には紅や紫しか入らないが、これも人情の自然の理である。

②白花冷淡無人愛，亦占芳名道牡丹。應似東宮白贊善，被人還喚作朝官。

「白牡丹」⁽¹³⁾

白い花は冷淡にみえるのか愛する人はいないが、それでも牡丹という名がついているのは、東宮の太子贊善大夫である自分でもやはり人並に朝官と呼ばれているようなものだ。

牡丹には異名が多いが、その中で「洛花」（洛陽の花、の意味）というものがある。牡丹の賞玩愛好は、長安より洛陽のほうが一段と熱狂的であつたらしく、当地では「花」の一語で牡丹を呼びならわしたともいう。洛陽の土地に適していた上に、丹精こめて栽培された結果、牡丹は洛陽が天下第一とさえ称えられている。⁽¹⁴⁾ また、則天武後の故事や李白「清平調詞三首」によって唐代で大いにその名が知らしめ、白居易の生きた中唐においては最ももてはやされた花であった。白居易は15首の牡丹詩を残しており（筆者調べ⁽¹⁵⁾）、特に親友 元稹との想い出が詰まった特別な花であった。そのうち他の詩人は決して描かなかった白牡丹詩が2首ある。それ

がこれらである。

①の五言古詩が作られた時期は特定できないが、「諷諭」に入っていることから左拾遺から京兆布戸曹参軍となり翰林学士だったころのもの（元和3年～元和6年：808～811年、白居易37～40歳）だと思われる。「和錢學士作」とあることから錢徽（中唐初期の大暦十才人のひとり錢起の子）の詩に答えたものであることは確かであるが、肝心の錢徽作品が伝わっていないのでこの「白牡丹」を完璧に読解することはできない。

②「白牡丹」は元和9年（814年、白居易43歳）、母の服喪後、太子左賛善大夫に就任するも不満な職であったようで、そのことを当時世間一般には淡泊で見栄えがしないとして好まれなかった白牡丹になぞらえて詠じたもの、とされる。⁽¹⁶⁾

中唐における牡丹流行は白居易を始め多くの詩人によって詠われている。しかし、もてはやされているのは主に赤い牡丹である。ひとり白居易が白牡丹を好んだ理由は何なのだろうか。埋田重夫の言う「白居易の詠花詩は、他の諸詩人に比較して、かなりきわだった傾向ないし特色を有している」⁽¹⁷⁾ 具体的根拠について考察を試みる。

埋田重夫は白居易の生涯を大きく三つに分け、その詠花特徴を挙げている。⁽¹⁸⁾

1. 長安周辺に限定された、43歳までの作品
2. 江州・忠州・杭州・蘇州などの外任期
3. 洛陽に居住した退任期

この中で「1. 43歳までの作品」において、特に白牡丹は「花がもつ属性をかりて、何かしらの政治性を説く題材詩となっている」と彼は言っている。

・世間で軽視される白牡丹を借りて、物の美醜が、そのものの価値によってではなく、人情によって決められることを述べたもの

「白牡丹」

・値を考えず、やたら牡丹を賞玩する世俗を諷刺したもの

「秦中吟・其十・買花」
・牡丹より農事に心をむける現皇帝を称賛したもの

「牡丹芳」

最後の「牡丹芳」で白居易が言いたかったのは「牡丹の妖艶の色を少し減らして、大臣たちの花を愛する心情を方向転換させ、わが君の農事を愛する心と同じようさせたいものだ」ということである。牡丹の美しさは誰も否定しえぬもので、それは仕方のないことだと言っているようだ。⁽¹⁹⁾

また、①「白牡丹」にみえるように、この詩では「虚」「白」がキーワードとなろう。「虚」は「実」の反義語であり、また何もないという意味を持つ。花に対して「虚」が生じてくるとは、対象によって自己の心に何のわだかまりもなくなり、心が落ち着くということであろう。中木愛は「無念無想の純白な心で生きるこの花に向い、白居易の心は落ち着きを得ることができた」と解釈している。⁽²⁰⁾ なお、「虚」は『莊子』内篇・人間世篇に「氣也者、虚而待物者也。唯道集虚。虚者、心齋也。（気というものは、みずからは空虚の状態にあって、いっさいの物を受け入れるものである。道というものは、この空虚にだけ集まってくるものだ。この心の空虚がほかならぬ心齋だよ。）」⁽²¹⁾ とあり、非常に哲学的な文字である。しかし、なぜ「虚」「白」を並列したのだろうか。

一つの仮説ではあるが、後述するように白居易の理想とした「中隠」が『莊子』「山木」篇の故事を下敷きにしているらしい、という点に着目してみる。白居易の精神的な理想は仏教を柱としつつも『莊子』にもあったのではないだろうか。つまり、仏教が語る死後の世界観に同意しシンパシーを保ちながら、現実社会においては『莊子』の世界観に理想を見たのかもしれない。そこで「虚」と「白」とを並列させるといふ発想が興ったのではないだろうか。「いっさいの物を受け入れる」境地を理想とし、白牡丹に重ね合わせ「牡丹という名を持つだけで、見向きもされないわが身。そういった、いっさい

いの境遇を受け入れる白牡丹」と「白」居易とを同一視したのではないだろうか。ちなみに「居易」とは「過ぎしやすい」という意味であり⁽²²⁾、彼自身は「過ぎやすきよう名付けられたものの、全くの名折れだ」と思っていたやもしれない。そこで、世間からは見向きもされない白牡丹に自己を見出し、恐らくその境地を誰も分かってくれないのでただ一人で花に向かった、と解釈できないだろうか。小松英夫の言う「白居易の愛好のしかたは、多くの花の咲き誇るさまや、大勢の群集の眼にさらされる花には感興を起こさないようにみえる。花というものはひとりしみじみと看るものだと白居易はおもっているのではないか。⁽²³⁾」という解釈にも通ずると考える。

さらに、中木愛の言う「自らの理想を清浄な白い花に見ることによって、心を慰めることができた。この詩には、世俗に対する批判とともに、白居易の栄華に対する見方、また一人静かに独自の世界に向かおうとする姿勢が表れていると言えよう。⁽²⁴⁾」に見える「独自の世界」がすなわち「虚」への志向と言えるのではないか。

この心境をややストレートに表現したのが②の詩と言えよう。白牡丹と白居易を、名が付いているだけで人は見向きもしない存在だ、と韜晦している。しかもそれを対句にして喩えており、花と自己との同一化を図っている。ここに、彼の独特な視点があり、白牡丹への愛着が読者に伝わるのだ。

このような白牡丹愛好は日本で大変好まれた。平安文壇は『白氏文集』をもてはやし、それを白居易自身も知っていたという。ただ平安時代だけでなく、白居易の好んだ白牡丹はその後長く伝えられ、以下の作品に影響を及ぼした。

「白牡丹というふといへども紅ほのか」

高浜虚子

「山蟻のあからさまなり白牡丹」

与謝蕪村

「まっ白な牡丹の花、触るな、粉が散る、匂ひ

が散るぞ」

木下空太郎

「近よりてわれは目守らむ白玉の牡丹の花のその自在心」

斎藤茂吉

3. 白花に寄せる思い

以上概観したように、白居易は白蓮と白牡丹に対しての思い入れがかなり強い。特に白蓮については蘇州からわざわざ遠い道程を経て、洛陽まで持ってきて移植している。そして、白花への愛着は生涯を通して見られるものであり⁽²⁵⁾、決して独自の視点を探し求めて詩語として用いたのではない。

また、白居易は鶴（色は当然白）や自らの白髪を詩に詠うことを好み、総じて白を好んでいた。では、白花に寄せる思いとは何であろうか。

本稿「1. 詠花詩について」でも触れたが、白居易の花に対する思いは決して「蒐集・栽培・鑑賞」でもって完結しているのではない。中木愛は「花を一回性をもった個の存在としてとらえ、この点で花と人が同じ運命にあることを見たのであろう。⁽²⁶⁾」と言うが、花に対してまるで人間に語りかけるかのような作品が多い。それも花を美人に例える擬人的な描き方ではなく、花が個性を持ち、あたかも家族・友人に対するような扱いなのである。さらに「花に語りかける」という行為がある。これは後世の曹霑『紅樓夢』にも登場する⁽²⁷⁾ものであるが、物言わぬ花だけには本心を吐露することができるのであろう。もっとも、吐露した本心を詩に書きそれを自選集に入れるという行動は、非常に「日記文学」的である。平安文壇に歓迎されたのはこの部分であったかもしれない。

さて、白居易の感情で生涯ただ一つ「哀」と表現できるのは、子が無かったことだろう。女子は元和4年（白居易38歳）に金鑿子、元和11年（白居易45歳）に羅兒、そのあとにも二人いるが、羅兒以外は早世している。大和3年（白

居易58歳)にやっと生まれた男子である阿崔は3歳でみまかってしまう。⁽²⁸⁾ 儒教的思考では家名を継ぐべき男子がいないことは、大変な心痛である。男子の代わりに可愛がっていた女子ですら次々と亡くなってしまふ。このような空虚な心に白蓮がしっかりとしたのかもしれない。白居易は仏教にシンパシーを感じていて、東林寺の白蓮を大変気に入り、後に洛陽の隠居所に蘇州の白蓮を移植したことはすでに述べた。この白蓮愛好は、単に白好みという理由ではなく、失った幼子の面影をそこに見出し、心を慰めていたという可能性もある。また、失ったわが子たちを「供養する」という発想があったかもしれない。前述のように、ハスには仏教的な意味と「若々しい」というメタファーとがあり、彼の心にある亡き子供たちを白蓮になぞらえていたのかもしれない。

4. 中隠と白

白とはどのようなイメージを持つ言葉なのだろうか。一般的には「清楚・可憐・色に染まっていない・高潔・気高い・何も残っていない(白紙に戻す、など)・ゼロ」などであろう。場合によっては光・聖という属性を持つ。また一方「喪・アルビノ(色彩異常)」などのマイナスイメージをも持っている。そして白居易にとって詩人としての大先輩である李白の「白」であり、自らの姓「白」でもあったはずだ。また、赤あるいは紅と白とは陽-陰の対照であると同時に、俗-雅の対照でもあった。白居易の好んだ白花は彼の目指した「中隠」と関係があるのではないだろうか。

「中隠」とは、白居易が兼済の志に基づく官僚としての生き方と隠棲を標榜する独善的な生活の一体化を目指して実践した晩年の処世術の一つである。⁽²⁹⁾

『新唐書』「白居易傳」に次のような記載がある。

大和初、二李黨事興、險利乘之、更相奪移、進退毀譽、若旦暮然。楊虞卿與居易姻家、而善李

宗閔、居易惡緣黨人斥、乃移病還東都。除太子賓客分司。…

大和年間のはじめに二李の政争が起こり、利権争いが盛んになった。出処進退や毀誉褒貶の変化は、まさに日の出入りのように目まぐるしかった。楊虞卿は白居易と親戚関係にあって李宗閔とよくしたため、白居易はそれにより自分の立場が不安定になるのを嫌い、病氣と称して東都の洛陽にもどり、太子賓客分司に除せられた。…

大和元年、五十六歳の白居易は、赴任先の蘇州より帰還し、洛陽の履道里の宅に入った。以後、退官に至るまでに、秘書監-刑部侍郎-太子賓客分司-河南尹-太子賓客分司-太子少傅分司-刑部尚書を歴任することになる。

秘書監-刑部侍郎時代は一時期長安勤務を経験したものの、洛陽を定住地とした白居易は、杭州・蘇州時代ころから意識され始めた、街に住んで官僚でありながら心は隠者の暮らしをするという「中隠」を展開させていった。そもそも、この「中隠」という処世術は、大和三年、五八歳の時につくられた「中隠」と題する詩の中で説かれている。この「中隠」の隠逸観こそ、十八年におよぶ洛陽での白居易の生活の根幹ともなる重要な処世術であった。なぜなら、首都長安から今後の生活の基盤を東都洛陽に移して政治の第一線からいよいよ退き、高官であるも重職の行政官ではない分司として、官僚社会との関係を保っていく行き方を選択した時点も、この「中隠」詩がつくられた大和三年の五十八歳でもあったからである。

「中隠」〔大和三年 五十八歳 洛陽〕

大隠住朝市、小隠入丘樊。丘樊太冷落、朝市太囂喧。不如作中隠、隱在留司官。

似出復似處、非忙亦非閑。不勞心與力、又免飢與寒。終歲無公事、隨月有俸錢。

(中略)

人生處一世、其道難兩全。賤即苦凍餒、貴則多憂患。唯此中隠士、致身吉且安。

窮通與豊約，正在四者間。

大隱は街中に住み，小隱は林丘に住む。林丘はさびれており街なかは喧噪そのものである。「中隱」として世から隠れ洛陽に分司の生活がよろしい。出仕しているようでもあり退いているようでもあり，忙しくはないが閑というわけでもなく，心・力を労することもなく飢えや寒さの心配もない。年中仕事はないが毎月俸禄は支給され，まことに結構このうえなき身分だ，…人の一生で，二つのことがどちらも満たされるということはない。身分が低ければ寒さや飢えに悩まされ，身分が高ければさまざまな悩みが尽きない。ただ「中隱」の士だけが，わが身に幸せと安らぎをもたらすことができる。困窮と榮達と富貴と貧賤と，この四つの間にいるのだ…。

ここで白居易は「中隱」について我が身をもって詳しく解説している。「大隱」と「小隱」は晋の王康琚の「反招隱詩」（『文選』卷二十二）の「小隱は陵藪に隠れ，大隱は朝市に隠る」に基づく語。そして「中隱」は文字通りその中間の存在であり，街中でもない林丘でもない洛陽の分司として隠れることであると説かれている。つまり，「仕」と「隠」との中間として，「賤」と「貴」，「窮」と「通」，「豊」と「約」などの極端を避けて両極の中間を大切にする，それが白居易の説く「中隱」の基本的な考え方である。

この考えは，以下の「閒題家池寄王屋張道士」詩〔六十九歳 洛陽〕でも述べられている。

有石白磷磷，有水清潺潺。有叟頭似雪，婆娑乎其間。進不趨要路，退不入深山。深山太濩落，要路多險艱。不如家池上，樂逸無憂患。…

白い石がきらきらと輝き，清らかな水が滾々と流れている。雪のような白髪のはは，その中を徘徊している。私は進んで社会的地位にも上らず，退いて山中に隠遁することもしない。山中はあまりにも寂しく，社会的地位は危険が多い。わが家の池のほとりには楽しめ

て何の憂いや煩わしさもない…。

「濩落」とは，俗世から身を退いた寂寞なさまをいう。これは，「村居寄張殷衡」詩の「金氏村中一病夫，生涯濩落性靈迂。唯看老子五千字，不蹋長安十二衢。（金氏村にいる病の私は，落ちぶれた生涯を送り心はうとい。ただ，『老子』を読むだけで，長安には足を踏み入れない。）」にも使われている語。この詩でも同じように，長安という名利の場と下邳という退去の場との対比において使用されている。「進んで要路に趨らず，退いて深山に入らず。深山はただ濩落，要路は險艱多し。」——権要の地位も求めず山中にも隠遁しないのは，山中は寂しいし，都は政争があつて身分が危ぶまれるからだ，と白居易は述べる。そして，「如かず家池の上，樂逸して憂患無きに。」と，「深山」と「要路」は，自身の「家」には及ばないとして締めくくる。白居易にとって洛陽の履道里邸は「深山」と「要路」の中間として，「中隱」を顕現する場所となりえたといえる。政治の中心長安で活躍していくのでもなく，また山に引きこもるような隠者でもないその中間，つまり東都洛陽の分司に身を置くことを白居易は選んだのである。

極端を避けて両極の中間にいること大切にすることこの「中隱」の主張は，さらに多くの作品にもみとめられ，晩年の白居易の出处進退を考える上での基調となっていると考えられる。以下，その例を挙げる。

・「菩提寺上方晚眺」

誰知不離簪纓內，長得逍遙自在心。

官職を帯びた身でありながら，逍遙自在の心を得られようとは誰が知つていよう。

・「同崔十八寄元浙東王陝州」

未能同隱雲林下，且復相招祿仕間。隨月有錢勝賣藥，終年無事抵歸山。…

未だともに雲林に隠れることができず，再び官職に招かれた。俸禄が頂けて薬を売るより

はましであり、年中無事であるから山中に隠遁したも同様である。

・「雪中晏起偶詠所懷兼呈張常侍韋庶子皇甫郎中」
君不見南山悠悠多白雲，又不見西京浩浩唯紅塵。紅塵鬧熱白雲冷，好於冷熱中間安置身。

君よ終南山には悠々として白雲が浮び長安の都には広く紅塵が立ち込めている。紅塵は騒々しく白雲は寂しいから、冷たさと熱さの中間にいるのがよい。

・「詠懷」

高人樂丘園，中人慕官職。一事尚難成，兩途安可得。遑遑干世者，多苦時命塞。亦有愛間人，又為窮餓逼。我今幸雙逐，祿仕兼游息。未嘗羨榮華，不省勞心力。…

高士は隠居を楽しみ、平凡な人は官職を求める。一つのことでさえ成し遂げるのは難しいのであるから、まして隠居と官職との二つは得難い。世間であくせくする者は、運命が塞ぎこむのに苦しむ。また閑遊の人生を愛する者は、飢餓に迫られる。

しかし、私は幸運にも両者を得て、俸禄と閑遊とを兼ねている。未だ榮華を羨まず、省みて心力を労することもない。…

・「幽居早秋閑詠」

幽僻羈塵外，清涼水木間。臥風秋拂簟，步月夜開關。且得身安泰，從他世險艱。但休爭要路，不必入深山。…

俗塵を離れた水木の間に閑居し、風のもとに臥せば秋が簟をはらい、月夜に歩いて門を開く。身の安泰を得て、世の中の艱難にはそのまま委ねる。ただ重要なポストを争うことはせず、必ずしも深い山に入ることもない。

蘇州刺史を辞した後、彼は、中央の長安の官僚でもなく山中の隠者でもない、東都洛陽分司という高官ではあるが行政職はない、しかしながら経済的には恵まれている、そういった身分を選択した。白居易はこうして「中隱」の觀念

を実践することで、結果的に心身の自在を実現することができたのである。また、「聞吟」詩には「我今幸在窮富間，雖在朝廷不入山。看雪尋花玩風月，洛陽城裏七年間。（私は今幸いにも貧窮の富貴との間にあり、仕官してはいて山林に入らず、雪と花と月を楽しみ、洛陽に住んで七年になる。）」とあり、白居易は「窮」と「富」の「間」にいることによって、「雪月花」を楽しむという独善の快樂も味わうことができたのであった。

ところで、吉川忠夫は、この「中隱」という隱逸觀を「恐らく白居易の發明にかかる言葉であったろう」と指摘する。⁽³⁰⁾しかし、「中隱」という名の由来は別として、はたして、この考え方は白居易独自のものなのであろうか。「詠懷寄皇甫朗之」詩〔開成三年 洛陽〕には次のようにある。

老大多情足往還，招僧待客夜開關。學調氣後衰中健，不用心來鬧處閒。養病未能辭薄俸，忘名何必入深山。與君別有相知分，同置身於木雁間。

老いては人が懐かしくなって往来が増え、夜に門を開いて僧や客を招待する。気を調和する法を学んでからは衰えた中にも健やかさがあることを覚え、余計な心使いしなくなり、騒がしいところでも閑適を得られる。療養中でも俸禄を辞退することはなく、名利を忘れるためには必ずしも深い山に入る必要もない。君とは己の分を互いに知っているから、同じように木や雁の間に身を置くようなものだ。

六、七句目の「養病未能辭薄俸，忘名何必入深山」は、前述してきた「中隱」の觀念に基づく出処のありかたを述べている。そしてこの詩で特に注目したいのは、末句の「同置身於木雁間」である。この「木雁」とは『莊子』「山木」篇の故事にみられる語であり、そこには以下のようにある。

莊子行於山中，見大木，枝葉盛茂，伐木者止其旁而不取也。問其故，曰無所可用。莊子曰，此木以不材得終其天年。莊子出於山，舍於故人之家。故人喜，命豎子殺雁而烹之。豎子請曰其一能鳴，其一不能鳴，請奚殺。主人曰，殺不能鳴者。明日，弟子問於莊子曰昨日山中之木，以不材得終其天年，今主人之雁，以不材死，先生將何處。莊子笑曰，周將處乎材與不材之間。…

莊子は山の中を通過して、枝葉の多く茂った大木を見つけた。ところが樵がその大木のそばに立ち止まったままで、伐採しようとしないので、そのわけを尋ねると、「使いようがないのです。」と言う。それを聞いて莊子は言った。「この大木は使いようがないという無用のおかげで切られもせず、天寿を全うすることができたのだ。」莊子は山を出て旧友の家に泊まった。友人は大そう喜んで、召使いに雁を殺して料理するよういつけた。召使いが「一羽はよく鳴き、もう一羽は鳴きませんが、どちらを殺したらよろしいでしょうか。」とたずねると、主人は「鳴けない方を殺せ。」と言った。明るる日、弟子が莊子にたずねた。「昨日の山中の大木は無用だということで天寿を全うすることができましたが、今回の主人の雁は無用だということで殺されてしまいました。先生はどちらの立場でいらっしゃいますか。」莊子は笑いながらこれに答えた。「私はその材と不材の中間にしようと思う。…」

話しの大筋はこうである。使いようのない木はその無用のために樵に切られずに天寿を全うし、一方、鳴けない雁はその無用のために殺されてしまった。先生だったら一体どちらに立場に身をおかれますか、という弟子の問いに対して、莊子が「材」と「不材」、つまり有用と無用の中間にしようと思う、と答えたというもの。先の白居易の「同じく身を木雁の間に置く」の句は、まさしくこれを踏まえた表現である。つまり、白居易はこの詩を贈った皇甫朗之に対して、「君と僕は己の分を棄えているのだ

から、材と不材の間に身を置いて禍を招くようなことはするな。」と促しているである。この莊子の「材」と「不材」の中間を選ぶという論理構造は、白居易の「中隱」の考え方のそれと共通していよう。さらに白居易は「偶作」詩で、「聞客病時慚體健，見人忙處覺心閒。…木雁一篇須記取，致身才與不才間。（人の病を聞いては、わが身の健康なことを感謝し、人の忙しいを見ては、わが心の閑なるを悟る。…あの木雁の篇をよく記憶しておくがよい。才でもなく不才でもないところに身を置くべきだ。）」ともうたっている。これは莊子の「木雁」の考えを弁えた白居易の達観の表現ではなかろうか。「賤」と「貴」、「窮」と「通」、「豊」と「約」のいずれの中間にいることをよとする白居易の「中隱」という思想は、『莊子』『山木』篇の「才」と「不才」の間に身を置く論理を応用したものであったとも考えられよう。

白居易は58歳以降、自らの余生を送る地を洛陽に定めて七十五歳の天寿を全うする間、政治の中心である長安を離れ、洛陽の履道里の邸宅で自適な日々を過ごした。そこには、俗世間に身を置きながらも政争という禍に不必要に巻き込まれないようにするための「中隱」という処世術が大きく作用していたのであった。

以上、白居易の中隱思想について述べた。彼は自らが思索した結果「中隱」の境遇を作り、そこに身を置くことができた。その中に「白」という色彩が特別なものとして認識されたのではないだろうか。白蓮や白牡丹に感じる「清廉潔白」「孤高不群」が、他者との拒絶を意味し、中隱思想に合致したものとして受け入れられたと考えられる。

もちろん、花房英樹が言うように「白」姓であることの自意識・美意識も関係しよう。彼によると白姓は胡姓ではないかとのことだ。⁽³¹⁾ 平岡武夫は「唐代で『旧唐書』『新唐書』の列伝には白居易・弟の白行簡・従弟の白敏中以外にはわずか4人しか見えない」と指摘している。⁽³²⁾ 仮に「白」が胡姓であり、白氏の姓が歴史的にも少ないことを、彼自身が大変意識していたか

もしれない。⁽³³⁾ そこで自己表現の一つとして「白」が中隱を表わし、自分の理想であるという思考を形成したのではないだろうか。

おわりに

本稿では白居易の白花詩を概観し、その愛好理由について考察を行なった。白花のうち特に白蓮は、仏教へのシンパシーの象徴であり、もしかすると幼くして亡くなった子供たちへの追憶であったかもしれない。白牡丹においては「虚」と「白」とに着目し、「虚」を「道が集まる空間」と解釈した『莊子』に中隱思想と通ずる理想を見たのではないかと仮説を述べた。なぜならば白居易は中隱という処世を理想とし、実行した人だったからだ。

白居易は白花を自らの親しい分身として、また現世の理想を具体化したものとして愛好したと言えよう。当然、埋田重夫が指摘する「白氏＝白花」の双関語（掛け言葉）説⁽³⁴⁾という要素も無視できない。しかし、彼にとって白花こそが、ほとんど自分と同一と言っても過言ではないほどに大きな存在であった。

なお、本稿執筆に当たり資料収集と白居易プロフィール・「中隱」については中元雅昭が、構成その他部分を池間里代子が担当した。

注

- (1) 「白居易の植物—中唐において」市川桃子『白居易研究年報(10)』2009年、pp.59～60
- (2) 前掲書「白居易の植物—中唐において」pp.66～71
- (3) 前掲書『中国古典詩における植物描写の研究—蓮の文化史—』p.106
- (4) 『中国花文化辞典』黄山書社、2000年、p.72
- (5) 「白居易の花の詩(五)」小松英生『中国学論集』安田女子大学中国文学研究会第8号、1994年、p.41
- (6) 「白居易における《白》に対する意識の二重構造—姓の《白》及び色彩の《白》—」西村富美子、『愛知県立大学外国語学部紀要第33号(言語・文学編)』2001年、p.405
- (7) 「中国古典文学と白蓮華」平野顕照、『文学部論集第85号』仏教大学文学部、2001年、p.52
- (8) 『楽府詩集』中華書局出版、1979年、p.384
- (9) 『中国の花ことば』中村公一、岩崎美術社、1988年、p.98
『关于「乐府」里所见的双关语』坂卷里代子、復旦大学留学生论坛集、1985年
「呉歌について」坂卷里代子、東京都立大学大学院発表会、口頭発表、1986年
- (10) 「白楽天の牡丹詩」藤井良雄、『福岡教育大学国語科研究論集35』1994年、p.50
- (11) 『白居易集卷第一 諷諭一』p.14
- (12) 『莊子』人間世篇に「虚室白を生ず」とある。
- (13) 『白居易集第十五 律詩』p.309
- (14) 『流謫の花』堀誠 研文出版、2003年、p.8
- (15) 「諷諭一・白牡丹」/「諷諭一・鄧魴、張徹落第」/「諷諭二・傷宅」/「諷諭二・買花」/「諷諭二・歎魯二首」/「諷諭四・牡丹芳」/「感傷一・西明寺牡丹花時憶元九」/「感傷一・和元九悼往」/「律詩・代書詩一百韻寄微之」/「律詩・醉中歸蓋屋」/「律詩・見元九悼亡詩、因以此寄」/「律詩・微之宅殘牡丹」/「律詩・惜牡丹花二首」/「律詩・白牡丹」/「律詩・移牡丹栽」
- (16) 「忠州刺史時代の白居易—花樹と詩人」波戸岡旭、『国学院大学大学院紀要文学研究科』2001年、p.2
- (17) 「詠花詩論序説」埋田重夫、『早稲田大学大学院文学研究科記要』別冊第10集、1984年 p.93
- (18) 前掲論文「詠花詩論序説」p.97
- (19) 前掲論文「白楽天の牡丹詩」p. 52
- (20) 「詠花詩に見られる白居易の幸福感」中木愛、『中国学研究論集』2001年、p.34
- (21) 『莊子内篇の研究』佐藤明、中国書店、1988年、p.180
『莊子 I』森三樹三郎、中央公論社、2001年、p.96
- (22) 『中庸』「君子居易以俟命」より
- (23) 「白居易の花の詩(四)」小松英生、安田女子大学中国文学研究会『中国学論集』1993年、p.29
- (24) 前掲論文「詠花詩に見られる白居易の幸福感」p.34
- (25) 前掲論文「詠花詩に見られる白居易の幸福感」p.34
- (26) 前掲論文「詠花詩に見られる白居易の幸福感」p.47
- (27) 『紅樓夢』第37回、菊を題に詩を作る場面。「問菊」「訪菊」などの題を作った。
- (28) 『白楽天』川合康三、岩波新書、2010年、p.204
- (29) この「中隱」の觀念に関して、赤井益久は「中隱」の実態はすでに陶淵明の思想を踏まえた韋応物によって提示されていたと指摘する。(赤井益久『中唐詩壇の研究』創文社、2004)
- (30) 吉川忠夫「白居易における仕と隱」(『白居易研究講座 第一巻』、勉誠社、1993年、210頁。)
- (31) 『白居易研究』花房英樹、世界思想社、1971年、

- p.40
- (32) 『白居易一生涯と伝記』平岡武夫, 朋友書店, 1998年
- (33) 前掲論文「白居易における《白》に対する意識
- の二重構造—姓の《白》及び色彩の《白》—」p.409
- (34) 『白居易研究 閑適の詩』埋田重夫, 汲古書院, 2006年, p.130